

---

# こいの化学反応

つば郎ベル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

こいの化学反応

### 【Nコード】

N3476BA

### 【作者名】

つば郎ベル

### 【あらすじ】

化学部室に、こもりっきりの主人公が一人の少女との出会いから始まる、化学反応ラブコメディ……なのか!?

## 初対面（前書き）

18禁シーンはカットして載せています。

## 初対面

「なんだ？ 今日も誰もいないの……？」  
半分冷やかしくも取れる言い方で『大松おおまつなみえ 奈美江』先生がそう言った。

「ええ、このシーズンになってもうちには誰も来やしませんよ」

「まあまあ、清水君。そんな諦めムードでいないで！ まだ、4月なんだから。一人くらいなら、来るんじゃないの？」

うちの部、『化学部』には、僕一人しかない。まあ、正式には『化学研究同好会』だ。部としては認められてはいない。だけど、同好会という名前が僕は嫌なので勝手に化学部と言わせてもらっているのだ。生憎、部には僕と顧問の大松先生しかいず、化学部の呼び名を聞く人間はこの二人以外ほとんどいない。去年僕がこの部を発足した時は同じ学年の生徒に呼びかけて部員を募ったのだけれど、結局誰も入ってはくれなかった。

僕はあの時、「頑張った所で誰も入ってくれないのだ」なんて思い知らされていたので、あの時から丁度一年経って後輩ができたこのシーズンになっても僕は部の勧誘なんて一切せず、いつも通りに放課後一人で化学部室を使わせてもらっていた。

「でもさあー。清水君？ 勧誘すれば何人かは入ってくれると思うんだけどなあ……、ほら、だって去年は君しかいなかったから部の設立と同時だったじゃない？ でも、今年は部はあって、部員が一人しかいないってだけなんだから、去年よりは見込みあると思うけど……」

「ええ、まあ、そうかもしれないけど、僕自身がやる気がないんですよ。勧誘の。なんていうかなあ、去年は僕も活気がありましたよね。自分でもびっくりするくらい。でも、僕も高校二年になって、なんていうかな、子供じゃなくなっちゃったって言うか……」

それを聞いて先生はアメリカ人みたいに大げさに手を両手に広げ、  
「ハァー」とため息をつきながら。

「清水君さー、私から見れば君なんてまだまだ子供よ？ そんな歳  
で子供じゃないってなに言ってるの！」

と、言った。僕はこれ以上話しても分かり合えないだろうな、と  
かクールに察してその話題は終わらせてしまおう。

「そう言えば、先生。例の実験器具、部費で出ませんか？」

一人での、活動は面白くない。ともなるとその反動か、難しい実  
験ほどしてみたくなるのだ。今は丁度、水銀を使った実験をやっ  
てみたくて前々から先生に頼んでいたのだ。

「ダメよ。水銀は高いし……危険だからね。うちの部は……本当は  
部じゃないし、余り問題は起こせないのよ？」

先生によると、実際、同好会扱いなことあつて、余り問題を起  
こされるのは学校としては嫌なのだろう。大した活動していない部  
もいくつがあるのに真面目にやっているうちがそんな扱いだってい  
うのは納得いかないけどね。

「わかりましたよー。水銀は諦めます」

元々、それほどやりたかつたといえ、そこまででもない。第一  
本当にやりたければ、自分で買ってやればいいのだ。まあ、さす  
がに実験のために高い水銀を買う気にはならないのだが……。

そうやって、この日もしばらくして、僕が飽きた頃に適当に部を  
終わり、家に帰った。

正直僕は、こうやって学校が終わった後、隔離されたような部屋  
の化学部室でダバるのが好きだった。まあ、化学の勉強や実験もす  
るのは好きだったから、僕にとっては落ち着く時だったのだ。そん  
な風に考えていたものだから、別に新入部員が入る入らないも正直  
どっちでもよく、寧ろ、大人数入ってこられて今の居心地を崩され  
る方が恐かった位だった。部への勧誘活動もポスターを一枚書いた  
つきり。化学部室前の廊下に貼った一枚のみだ。しかも化学部（化

学研究同好会)と小さく書くのが嫌だったのも今でもはつきり覚えている。そんな訳で僕は今の状態で満足なのだ。自室みたいに化学部室を昼休み、放課後と使える今の状態。部活動は僕が一人で好き勝つてにやっつて、たまに先生が来る。それで良かったのだ。

……そう思っていた、ある日の放課後。

その日も僕はいつも通り、変わらず、部室にいた。一応僕は将来、化学者になりたいと思っっている人間だ。色々調べて化学について勉強している。まあ、本格的な勉強は大学に入ってからと考えているのだけれど、今時間があるならするに越したことはない。そう思っていた。

高校で習う分の化学は一年の時に終わらせてしまっていて、今は独学で色々勉強している。毎回化学のテストでは95点以上は取っている。本当は100点取って当たり前だと思っっている。だけどなかなか引つ掛け問題とかもあつて、100点つてそう取れないよね、本当に。

ちなみに他のテストはといえませいぜい60〜70点という平均レベルだった。

そんな感じで今日は大学で教わるらしい化学の範囲が載った、親戚の大学生のお兄さんに貰った問題集を解いていた。

そうして、少しした時。コンコンとノックの音がした。

「なんだ。今日は早いなあ、大松先生。開いてますよお！」

丁度、僕の座っているポジションというのは扉の真後ろにあるのだ。だからノックされても対応できないとか面倒だった。けど、ノックなんて珍しい。昔は必ずしていた先生だったけれど、最近はいらないとわかったのか、まずしなかったのに。

もしか、両手でも塞がっている……？ そう思っつて、僕はイスを回転して、扉を見た時だった。

「あ……」

思わず、声が出た。そこには、知らない生徒、女の子が遠慮がちに顔を出していたのだから。

「あ、あのっ！ ……入っていいですか……？」

彼女がそう言った。僕は余りに想定外の出来事でどうしていいのかわからなかった。

そうして、困っていると。

「えっと、ここ、化学部ですよ？ 見学………に来たんですけど………いいですか？」

そう言っつて、モジモジしている女の子。あ、見学？ そうか、そんなシーズンか………今。

本気で新入部員なんて一人も来ない疑っていなかった僕にとつて正直混乱するほどびっくりする出来事だったのだ。うん、だから許して、ホント、いやホントゴメンナサイ。

「あー、ああ、うん、見学？ うちの？ ああ、いいよ！ 入っつて、ホラ！ き、汚い所だけど………」

僕はテンパツてなにを言っつているのだから、自分でも良くわからなかった。前に大松先生が『君なんてまだ子供』と言っつていたけれど、たしかに僕なんてまだ子供だな、と思っつてしまった。だつて、こんなイレギュラーなことが一つ起きただけでもう、分けわかんなくなるんだもん。結局、人つて慣れた環境にいるから落ち着いて対応できるだけで、経験したことがないことが起きると誰でも子供みたくにどうしていいか、分からなくなるんじゃないか？ なんて、思っつていた。

彼女は、そわそわしながら時折、扉のほうを気にしたりしていた。「ここつて………外からは誰にも見えないんですね」

「え？ ああ、そうだね。僕がね。隔離された部屋が好きだからね………窓も塞いでいるんだ」

冷静になつてみて、彼女を観察してみる。身長は小さめで、肩くらの髪。何か小さな花の形のした髪留めを左に付けている。顔は

全体的に子顔で、目は少したれ目で、鼻は丸くて可愛らしい。全体的に評価すれば、小さくて可愛らしい女の子って感じが良く出てる子だけど、一般的な人の評価で言えば『そこそこ』ってレベルじゃないだろうか。

……まあ、僕は好きだけど。

「……どうしました？」

彼女が視姦されていることに気付いて、こちらを見た。

「ああ、いや、名前まだ聞いてなかったと思ってね？」

まあ、見ていた事と、名前言っていないことは微妙に余り関係ないのだけれども、なんとか誤魔化せただろう。我ながら最もらしい言い訳だ。

「あつ………すいません。私、一年A組の貝原かいはら 鈴女すずめです。宜しくお願ひします」

と言つて、彼女はぺこつとお辞儀をした。

「貝原さんか。あつ、僕は清水 良太、一応化学部の部長をやっています。つて言つても僕しか部員がいないんだから当たり前前だけだね？」

そう言つて、僕は漫画みたいに照れくさそうにして誤魔化す。自分はこのなにならないよなあ、と思つてああいうのつて見ているけど、いざ自分がそういう場面に出くわすとそうなってしまう。人間つてつくづく不思議なもんだ、と僕は思っていた。

「あのう……先輩？」

「へっ……？」

うわあ、我ながら変な声を出してしまった。だつて、『先輩』だなんて、ビックリした。僕のこと？ いや、それしかないだろ、落ち着け、良太。

「実は………決めたんですけど、わたし、化学部に入ろうかと思ひます！」

彼女は僕が変な声を出したことには、触れずいきなりとんでもないことを言い出した！



ん？ いや、そんなとんでもないことでもないのか。ただちょっと決断が早いって言うのはあるけど。

「いいのかい？ まだ、このシーズンだしそんなに早くに入る部活に決めなくていい頃だよ？」

「いえ、わたしこの部屋、気に入りましたし。それに私、運動なんて出来るタイプじゃないですし、最初から気に入る文化部が無かつたら部に入る気なかつたですから」

「そう……か。まあ、だったら、いいんじゃないかな？ 僕も化学部作つたときは迷いなんて無かつたし」

まあ、彼女自身が入りたいって言うんだからいいだろう。逆に入りたいて言っているのにわざわざ止めさせるのも意味分からないしね。それに……それになんか彼女と一緒に部活動をするのを想像すると……なんだか、いいなって感じに、思い始めていた。

「ありがとうございます！ じゃあ、これから宜しくお願いしますね？ 部長！」

「あ……いや、貝原さん？ 出来れば先輩って呼んでくれないかな？ 部長ってなんだか恥ずかしくって……」

「え？ そうですか？ じゃあ、清水先輩、今日から宜しく願いますねっ」

し、清水先輩という響き。い、いいなあ……。な、なんだか。感動したっ！

## 美味しい化学反応(前書き)

そういえば、この小説は視点がころころ入れ替わります。

## 美味しい化学反応

翌日、昼休み。僕はいつも通り、化学室でお弁当を食べているとコンコンと昨日と同じ、ノックの音が聞こえた。僕は振り返ると扉まで行って、開ける。

「貝原さん、昼休みも来たの？」

「はい、ここでお弁当食べてもいいですか？」

と、彼女が両手に抱えたお弁当を持って言った。昼休みも来るなんて……どういう風の吹き回しだろう。そんなにこの場所が気に入ったのかな。

「貝原さん……友達とかいないの？」

と、僕が聞くと。

「うう、まあ、そうですね」

と、彼女はバツが悪そうに言った。

「わたし、隣の町から通っているんですよ、だから中学の頃の友達はみんな地元の高校に行っちゃって……。ここでも、ホラ、中学での仲良しグループみたいなものがあるじゃないですか？ わたし、それに馴染めなくて」

「たしかに、そういうのはあるよね……」

でも、女の子だったらどこかのグループが仲良くしてくれそうな気もするけど……ってまあ、まだ入学して一月も経ってないものなあ。

「でもじゃあ、尚更みんなと仲良くなるために、昼休みなんかは誰かと一緒に入れればいいのに。僕なんかと一緒にいてどうするの……」

「いえ、わたし、この場所好きですし……それに……」

なんだから、聞いちゃいけないことを聞いた気がした僕はこの話題を終わらせた。

「ああ、そういえば！ 君の事、大松先生に話したらね、凄く喜んでいたよ。それでね？ 今日の放課後、歓迎会も兼ねて簡単な実験をしようと思っっているんだけど時間大丈夫だよな？」

今までは僕一人の部だったから僕の好きなようにやっていたのだけれども、これからはそうは行かない。まあ、初心に帰って初心者でも楽しめる、化学の面白さを知ってもらえるような実験をしよう、そう僕は考えていた。

「うわあ、いいですね。楽しみですよ！」

彼女はそう言って、手をぽんと叩くとか、ベタなことをしていた。

キーンコーンカーンコーン

……そうやって他愛も無い話をしていた頃、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。僕は彼女に「それじゃあ、放課後ね」と言うと、彼女はニコツツと微笑んで、一階に続く階段へと消えていった。

放課後。僕は早速、今日やる実験の準備に取り掛かっていた。卵酢、ケーキシロップ、後はコップと蓋をするためのラップだ。僕はカチャカチャと実験道具を用意する。

ああ、僕がこんな小学生がやるような実験をするなんてな。まあ、でも簡単でわかりやすい実験だ。それに……この実験は大松先生が大好きな実験だ。いや、正式に言えば大好きなのは実験じゃなくて、その後の……。

「こんにちは」

まだ、来なれていないのか、貝原さんは様子を伺うような感じで扉から顔を出していた。僕が「入って入って」と手招きして中に入る。化学部室は元々は理科準備室だ。使わなくなっただから、と言うより僕の権限で自室にしているような部分がある。なぜそこまで僕に力があるかと言えば、そこそこの有名な化学者の父がこの高校のOBで僕が息子だからだ。

準備室だけあってせまい。僕が勝手に実験できるようにとテーブルを置いたり書類を置いたりもしているものだからテーブルを挟んで左右に一人ずつ往来出来る程度の広さしかない。

その結果、僕のいつものポジション、部屋の隅の扉に背を向けた僕の席の隣に来る貝原さん。

なぜ、隣に来るのだろう。いや、たしかに離れるのも変な話なのかもしれない。彼女は化学には初心者なのだから僕に教わりに来ている部分もあるはずだ。なのに離れた場所にいると言つのもそれはそれで不思議だろう。

まあ、いいか。丁度隣にいることもあつてか僕は彼女と色々話題を振ってみることにした。

「貝原さん、一年だったよね？ 授業はどう？」

「授業ですか？ そーですねー。まあ、置いていかれないよう頑張ってますよ！」

彼女は笑って誤魔化すようにそう言った。

「ははは……まあ、理科系だったら僕が教えてあげるから、まあ、他の教科は勘弁してね」

今度は僕が誤魔化すように笑つて言う。

「あつ、じゃあ、理科なんですけど、宿題出されちゃって……見てくれませんか？」

そう言いながら、貝原さんはカバンから学校で買わされる問題集を出してページをめくる。

「教えるって言つても、答えそのまんま教えないよ？」

「わかつてますよお、……あ、でも、じゃあ、どうやって教えるんですか？ 数学じゃないですし……」

たしかに、理科の問題でヒントも何も無い気もする。寧ろ答えを教えてしまつて、しっかり理解するように説明したほうがいいんじゃないだろうか？

「……それじゃあ、こうしよう。答えは全部教えてあげるよ」「えっ」

貝原さんは一瞬嬉しそうな顔をするが……僕はかまわず続ける。

「但し、僕が一つ一つ説明していくよ、つまり僕の授業をずっと、聞いてく感じになっちゃうけど……」

ただ、これをやると……。

「うーん、ちょっと大変そうですね、テストの点は良くなりそうですね、お願いします」

以外にも彼女は僕の提案を受け入れた。

近くのスーパーまで買出しに行っていた、大松先生はご機嫌な顔で化学部室に向かっていた。理科の教員であるためかいつも白衣だ。天然パーマの独特な髪にスタンダードなメガネ、とりわけ美人でもないが、歳は29と、まあ若く、それなりに顔は良い。一部の男子生徒からは人気の先生だ。

買ったのは、バナナ、ホットケーキミックス、生クリーム、アイスクリーム……。

傍から見れば、家庭科室にでも行くのだろうと思われる持ち物だ。それらを持ち込み、今日も元気に化学部室に入る。今日は歓迎会だ。この時のために昼も抜いた。それくらい楽しみだったのだ。

「だから で、あつて」

「こんにちわー……ん？」

大松先生が買ってきた袋を持ち直しながら扉から顔を出すと、そこには自分の世界で演説する清水君の姿があった。

新入部員の貝原君もいたが、完全に、ばたんきゅー状態だった。

「あー。やつちゃったか。ダメだよ、貝原さん、彼に演説させちゃあ、彼に自由に話させると、何時間でも止まらないよ、もう何、言ってるんだか分からなかったでしょ？」

「はいっ……、もうほとんど、化学式でしゃべるんでもう、日本語にすら聞こえません……」

貝原君は半べそだ。と、清水君はまだ、演説している。H<sub>2</sub>OとかNH<sub>3</sub>とかそういう簡単なのだったら分かるっても、高校生が分

からないような化学式でしゃべられても困るっての。

「私も気をつけるように彼に入ってるんだけどね」

ハハッと、苦笑いしながら言う。

「理科の担当の先生が言うのと余計にとんでもないことなんだなって実感します」

貝原君も参った様子でそう言った。

## 美味しい化学反応 2

気持ちよく、化学の世界にのめり込み言葉を並べていると自分だけの空間がそこには見えてくる。

それは、いわば、妄想世界の様に心地よく酔えるという事だ。

僕はまだ未成年だからお酒は飲まないけれど、たぶんどんな銘酒と言われるお酒でも、こっちはいかないだろう。この『語り』に勝るもの無しなのだ。

そんなことを思いながら、僕は貝原さんに気持ちよく宿題を説明していると、「ピコン」という音と共に、僕の頭に衝撃が走った。

「なんですかっ！ 痛いじゃないですか？」

僕は、とつさにそう言つて、全く見ていなかった前を見るとそこにはお祭りによくある、中に空気が入ってるハンマーみたいなのを持った大松先生がいた。

…… ああ、またやってしまったか。

僕は化学が好きな余り、こっ、よく人に演説するかのようには喋りだしてしまうのだ。そしてよく、大松先生に注意される。自分でも気をつけていたから最近はやらなかつたのだけれども、まあ、なんだ。結局テンションが上がったらこっくなってしまうのだね……。

机でダウンしている貝原さんに「ゴメン」と軽く謝つて、僕は身をすくめた。

「さてさて、気を取り直して実験するんでしょ？ 清水君？」

と、先生が気を遣うように言った。

「ああ、そうですね、わかりました。じゃあ、やりますか？」

そう言つて、僕は気を取り直して準備をした。

実験道具の卵、酢、ケーキシロップ、コップ、ラップをテーブルに置く。



「さて、じゃあ、始めようか、貝原さん初めてで色々分からないかもしれないけど今回は僕が説明しながらやるからまあ、見ていてね？」

「えっ……説明するんですか？」

貝原さんがさっきのことを思い出すように言う。

「あ、いや、大丈夫だから。実験の時はああはならないよ」

「あっ、はい」

「まず、コップに酢を入れます」

僕は、コップに半分くらいの酢を入れてから貝原さんに酢を渡す。

同じように貝原さんが酢を入れる。

「次のこの生卵を入れます、あっ割らないでそのままね」

「はいっ！ ほっ……」

僕に続いて彼女もそつと、コップに卵を入れた。テーブルには二つの卵が浮いたコップが並んでいる。変な光景だ。

「これで、二日待ちます」

「……えっ!? 二日待つって、じゃあ今日はもう終わりですか？」

「まあまあ、貝原さん、そう思って……」

と、言いながら僕はテーブルの下から、おとつい仕込んだ同じものを出した。

「これが、二日前のものです。ジャーーン」

「料理番組みたいな用意の良さ……って、おおー！ 殻が無くなって、卵が大きくなってますねー!!」

彼女の言った通り、殻は消滅しコップに溢れそうな位に中の卵が膨張していた。

「すごいですねっ！ 酢に浸すだけでこんなにも大きくなるんですね！ 黄身も何倍も大きくなってますね！」

普段、それほどテンションの高いほうではないと思う彼女が興奮している姿を見ると僕はなんだか嬉しかった。

「それで……この実験はこれで終わりですか？」

と、貝原さん。

「いや、次はさっきの酢の変わりにこれを入れる」

と言つて、僕が持ったのはケーキシロップだ。今度はこれを入れる。

僕と彼女はさっきと同じ手順でケーキシロップに卵を浸した。

「……で、今度は何日待つんですか？」

「はい、察しの通り、また二日待ちます。……で、これが二日後の物です！ ジャーーン」

僕はさっきと同じようにテーブルの下に用意していた二日後の物を取り出す。

「おおっ！ えっ？ これ、本当に同じ卵ですか？ ウズラの卵みたいになってますよ？」

「うん、不思議でしょ？ さっきと同じ普通のサイズの卵だよ。これがここまで小さくなるっていう実験だよ」

実際に目の辺りにすると単純だけど手品のような不思議な実験だ。

「これはどういう原理なんですか？」

「これはね、浸透と言う現象なんだよ。まず、酢が卵の殻を溶かすんだ。溶かした後は卵は薄皮むき出しの状態になる。これは半透膜むき出しの状態ってことなんだけど、その後、酢との溶質の濃度を調整するために水を含むんだ、卵がね。その結果、膨張する。次にケーキシロップは卵よりも溶質の濃度が高い。だから今度は水分を外に出すことで濃度を調整しようとして小さくなるんだ。こうやって半透膜から液体が移動することを浸透と言うんだよ……わかった？」

「ま、まあ、なん……となく……？」

絶対分かっていなさそうな顔丸出しで、貝原さんが笑顔でそう言った。

貝原さん。ダウンしないで聞ける様になっただけでも君は進歩したよ！ と、僕は心の中で思ったのだった。

「おっ……終わった？」

さつきまで、隅で暇そうに本を読んで時間をつぶしていた大松先生が察したようにこっちに来る。

全く持って、現金な人だ。自分の好きな行事にしか顔を出さない、集団的な集まりとかには絶対勝手な行動をしまっタイプの人だな、この人は。なんて僕は勝手に思う。

「ええ、終わりましたよ。それで、この実験の終わった後のアレが大好きなんですよね、大松センセ」

「もちろんじゃないか、清水君、先生はこの時のために今日は昼を抜いてきたんだ。早く食べようよ、ホットケーキ！」

とか、言って先生は自分で買ってきた、スーパーの袋をテーブルに上げる。

「えっ……？ これから、なにやるんですか？」

一人状況の分かってない、子猫ちゃんこと鈴女ちゃん。まあ、当たり前だ。説明してないんだもの。

「ああ、貝原さん。実はね歓迎会を兼ねて、ホットケーキパーティーだよ、大げさに言っとな。まあ、この実験、卵使っし、ケーキシロップ使うもんだから前にした時、ホットケーキでも作れるんじゃない？ とか、言い出した大松先生のおかげでこの実験をやるたびに実験後はホットケーキパーティーになるといっ寸法ですよ」

まあ、もっとな簡単に言えば大松先生がホットケーキが大好きだといっそれだけの話だ。

貝原さんは、「ああー」と言って、とりあえず状況を理解してくれようた。さすが、女の子は物分りが良くて助かる。僕のような人間は理屈を求めるからな。

「……で？ 清水君。どこで作るの？」

と、大松先生。

なんで、その辺は僕任せなんだよ！ 自分で決めとけよ！ と、僕は心の中で突っ込む。

「まあ、ここでは火は無いですからね、家庭科室でしょう、普通に」  
「ん？ いや、待てよ？ 良太君、ここにもあるじゃないか？ ホ  
ラ、あれだよ。映画とか小説とかでよくやるようなさあ、アルコー  
ルランプでお湯沸かしてコーヒーとかカップメンとか作ってるじゃ  
ん？ あの方式でやれば……」

「良太君とか、いきなり下の名前で呼んでも誰もわかりませんよ！  
あと、なんですかそれ！ 読者さんにコメント欄で言われるほど  
ベタな設定！ フライパン暖めるほどの火じゃないでしょう。アル  
コールランプじゃあ」

「ああー、やつぱ、ここじゃ無理かあ、ん？ でも、じゃあ、調  
理しないで生で食べちゃえばいいんじゃない？ もう、料理しない  
でそのまんま食うとかさ？」

「ダメですよ！ おなか壊したりしたらどうするんですか！」

「あー、ユツ……、なま肉みたいに？」

「ギリギリだよ！！ 先生！！」

って、何を調子こいてコントみたいなのをしているんだ……  
……僕は……。

そんな感じで、僕はテンション上がりすぎた先生を落ち着かせな  
がら自分も落ち着けて、ペースについてこれない、貝原さん改め、  
鈴女ちゃんも輪に入れた。（エロい意味ではなく）

## 気さくな男、遠藤さん

ピンクの可愛いエプロンを着て、笑顔でフルーツを切る鈴女ちゃんが僕の隣にいる。

僕らはあれから家庭科室に移動し、ホットケーキを作っている所だ。

「貝原さん……いやにごきげんだね」

「えっ？ それはそうですよ、だって、わたしのためのパーティーなんですよ？ そんなの、嬉しいに決まってるじゃないですか」

「いや、でも、大松先生がホットケーキ食べたいだけっていう感じだし」

「……それでも。それでも、わたしのためのパーティーなんですよ？」

鈴女ちゃんは、僕のほうを見上げながらそう言う。身長差から少し上目遣いのようになっていてそれがなんとも可愛らしい。

「うん、まあ、形としてはね」

「じゃあ嬉しいですよ、そんなわざわざ、わたし一人のために準備してくれて」

と、しみじみといった感じで言う鈴女ちゃん。そういうものだろうか……？ そういうものなんだろうな、女の子って。なんて漫画なんかでしか女の子に関する知識を持っていない僕がいかにも知ったかのように、そう言っても本当にそうかなんて、分からないんだが。

僕はその後も時折、彼女の様子を横目で見ながら、17枚目のホットケーキを焼きにかかった。余った分は先生が持ち帰るからと、とりあえず20枚作れと言われている。というか、ホットケーキくらい自分で作ればいと思うのだが、先生曰く『社会人は時間が無い』のだそうだ。それを言い訳にするのもどうかと思ったが、まあ、そ

うなのだろう。

「いただきまーす！」

大松先生と鈴女ちゃんの声がハモツて、中学生の合唱コンクールみたいになっていた。

なにもしていない大松先生が一番、堂々と食っているのもなんだか可笑しかった。だが、鈴女ちゃんもそんなこと全く気にも留めず、一緒になって夢中でホットケーキを食べている。生クリーム、フルーツ、チョコなんかを好きなだけのせて食べている。僕はそこまで甘い物が好きってわけでもないのだが、まあ、なんというか、女の子って本当に甘いものが好きなんだなあなんて、僕はこの時、心から思った。

結局、僕が3枚、鈴女ちゃんが4枚半、先生が8枚という、ある種リアルな数字食べて、お開きとなり、残りの5枚程度は先生が有難く持って帰ったのだった。

帰り際、鈴女ちゃんが『今日は楽しかったです！ 有難うございました！』と、アニメに出てきそうな女の子みたいな笑顔で言っ  
帰っていったのがやけに印象深かった。

翌日。

大松先生から聞いた話では、今日、化学部OBの『遠藤さん』が来るとのことだ。遠藤さんというのは本名を『遠藤 孝俊』たかとしと言っ  
て、僕が入学する一年前まで一人で化学部に在籍していた僕の元先輩だ。僕が入学した時、化学部を立ち上げたのだけれども厳密には少し前まであったのだ。遠藤さんは高校三年になって受験勉強を理由に部を無くした。まあ、元々一人ってこともあってそれほどしっかりした活動をしていたわけではなかったようだ。僕は少し前まで化学部の顧問を担当していて遠藤さんと交流があった大松先生と一緒に『少しは出てほしい』とそう何度かお願いした。遠藤さんは優しくして、無下にすることなく聞いてくれたけど、やっぱり受験勉強

が忙しいってことでたまに顔を出すってことで落ち着いた。

その時は、それで誤魔化したようなそんな感じだったのだけど、以外にも遠藤さんは月でも多い時は3回から6回くらいも顔を出してくれるときもあって、受験勉強の息抜きの場として結構気に入ってくれたみたいだった。

今年、卒業して忙しくもあるだろうけど、少しは余裕も出てきたのか今日、初OBとして、久しぶりに顔を見せてくれるとのことだったのだ。

「　ってというのが、遠藤先輩でね？　今日来るってことなんだよ」  
僕は今日も化学部で鈴女ちゃんと二人だったので、今日来る遠藤さんについて鈴女ちゃんに説明していた。鈴女ちゃんは入部してからというもの毎日、僕とほぼ同時に部室に来る。僕が放課後になるとすぐに来ているから、鈴女ちゃんもそうだとということになる。

「じゃあ、その遠藤先輩って方は大学生なんですか？」  
と、鈴女ちゃん。

「そうだね、今年からね」  
「わあ、大学生って……なんだが、大人って感じがしません？　わたしなんかより全然大人ですね……」

「うん、まあ、貝原さんはまだ高校一年生だもんね？　そりゃそう思うか」

「ええー、清水先輩もわたしと一つしか変わらないじゃないですかあ」

ふくれっ面で鈴女ちゃんが言う。そう言われても、僕は他人と同じような感覚が持てない人間だ。同い年どころか、今まで会ってきた他人、全てわかりあえないと、そう思っているのが僕だ。例外的な人物、それが父とそして遠藤さん。この二人にだけは僕は頭が上がりたくない。決して、鈴女ちゃんが嫌いとかそういうことは無いけれども、これはそういった類の話ではないのだ。

「オーッス！　清水！　きたぞお！！」

と、ガチャっという扉を開く音と同時に顔を見せたのは今しがた話に出た遠藤先輩だった。

「あっ……こっ、こんにちはっ！」

鈴女ちゃんが、ビクビクしながら挨拶をする。

「あ、ども。……清水？　この子だれ？」

と、遠藤さんが聞いてきたので僕が「ああ、この子は新入部員の貝原さん」って言うと同時に

「……彼女？」

と、聞いてきた。

「違いますよっ！　新入部員って言うてるじゃないですかっ！」

僕はそう否定しながら隣にいる鈴女ちゃんに目をやると以外にも照れたりせず、大人しく僕の表情を観察しているようだった。それでもその後、下をうつむいて縮こまっている。やっぱり恥ずかしかったのだろうか。

「まったく、遠藤さん、からかわないでくださいよ」

「いや、ちよつとふざけてみただけなんだが、お前がそこまで焦るとは思わなかったよ、案外……いや、やめておこっ」

案外……なんだ？　気になるな。遠藤さんはOBであることをいいことにアロハシャツで下はジーパンと気分はスーパークールズだ。髪は5：5の真ん中わけで、そこそこのイケメン……と、自分で言っていた。早速、辺りを物色している。勝手に部の冷蔵庫を開ける、遠藤さん。まあ、元化学部なので、その辺は大目に見ているが……。

「……あ、清水、お前らまた、ホットケーキ食っただろ？」

「あっ……気付きます？　やっぱ？」

「いや、そりゃ、シロップとかチョコとか増えてるし、最近開けた丸出しのホットケーキミックスあるしな」

「まあ、彼女が部に入ったからですよ……」

僕は照れながらもそう白状する。わざわざ自分で言ったのは、そう



しないと彼に突っ込まれるからだ。だったら最初から自分で言ってしまったほうがいい。

「あー。なるほど」

と言いながら、冷蔵庫から顔を出し、鈴女ちゃんの方を見る遠藤さん。そしてタジタジになる、鈴女ちゃん。

「そっかあ、ま、彼女には相当入れ込んでるって訳か。ああ、変な意味じゃなくてな！ まあ、彼女も満更でもないようだし？」

遠藤さんは『バンツ！』と冷蔵庫を閉めながらそう言った後、含みのある細目をしながら鈴女ちゃんを『じいー』と見る。

「遠藤さーん！」

と僕は、いい加減、といった意味を込めて言う。

「おお、悪い悪い、冗談だよ。……と、そうだ清水そっいえばな、前の『サインスZERO』の話なんだがな……」

「ああ、あれですか！ 太陽光パネルのやつですよね！？ 面白かったですよねー！」

「……………」

「……………」

かれこれと、もう20分以上はよく分からない化学の話をしている清水先輩と遠藤先輩。わたしは一人話がまったく分からなく、つまらなかつた。あーあ。今日も清水先輩と色々話したかったのになあ。……なんて。どうせ、ここから出られないんだもん。話し相手でもいた方が、いいってもんだ。

……………でも、さすがにこれは退屈だな……………。

部屋の外に出ると、『あいつ』がいる。だから、出られない。

……………でも、やっぱ……………退屈。あつ。……………尿意がした。これはしかたない。さすがにトイレにだけは行かなくてはならない。『あいつ』と会う可能性があるうとも。

わたしは部室に一番近い2階のトイレに行っている。基本二年生

用のトイレだ。ここだったら、会う可能性はない。

わたしは、戻っても退屈だろうと思ひ、会わないようにそそくさと済ませるいつもとは別に、今日は時間をかけて行く事にした。

「あっ……わたし、ちよっと」

いつものように、清水先輩に言つて、席を立つ。トイレとは言つていないけど、いつものことだからそこまで言わなくてもわかつている。

わたしは、珍しく一人になりたくて、いつもは好きな閉鎖空間を出て、トイレに向かった。

## 不審人物

「で？ 本当のところ、どうなの？」

鈴女ちゃんが部室を出たのを確認した後、イスにドカッと、腰を下ろして、遠藤さんが言う。

「本当の所って？」

「あの子のことだよ、お前……どう思ってるんの？」

「……嫌いじゃないですよ」

「……なんだよ、それ。はっきりしないな」

「……………」

僕は何も言い返せない。

「好きなのか……？」

遠藤さんは少し考えたそぶりをした後、はっきり言ってきた。

「まあ、嫌いじゃないですね」

「そうとしか、答えられない……。」

「そうか、好きなのか」

「……………」

否定……できなかった。……じゃあ、僕は、好きなのか？ ……

そこまでよくわからない。

「わかりません。僕はそういう経験ないですし……………」

「……………」

遠藤さんは部室の冷蔵庫から缶コーヒーを二つ取り出し、一つを僕の前に置く。

「ま、飲めよ」

「……いや、僕の買ったやつなんですけどね。いいけど。」

そうして、遠藤さんは缶コーヒーのフタを開け、一口飲んで言った。

「まあ、一つ言っておくけどさ……………。あの子、なんか裏がありそうなんだな……………」

「……………は？」

裏……………？ 裏つて？ 僕は、理由を求めるように遠藤さんを見た。「いや、他人から見たらさ、なんか、お前なこと狙ってるように見えるよ、なんか」

「それは……………別に」

いいんじゃないんですか？ と言いつつになつたがそれは恥ずかしいので口を止める。

「まあ、問題ないんだがな。……………仮に。そうだとして、お前どうする？ それでも、彼女とやっていくのか？」

まあ、要するに遠藤さんは鈴女ちゃんが僕に対して何か他意があつて、僕に接しているのだとそう言っているのだらう。その上で僕はそのままそれを受け入れるのかと。

「……………今は、彼女のが好きかどうか……………まだ分かりませんが。もし、彼女を好きになつたとしたら、それは僕の、僕自身の問題です。彼女が僕に良からぬことを考えているとか……………そんなこと、関係ありません」

僕がそう言つと。

「そうか……………でも。でも人間。たいそうなことは何とでも言えるんだ。でも……………実際に、行動しなければならぬ瞬間に直面して。その時、君は正しい決断を出来るかね……………？」

コーヒーの缶を手でぶらぶらさせながら、遠藤さんがそう言った。「えーと、その……………彼女が、何か企んでるつて言つか……………そういう可能性つて高いんですか？」

「……………一つ。俺は、こういう勘はよく当たる。……………二つ。実は彼女、前に一年の教室の前で見たことがある。その時、ちよつとな」

「一年の教室つて言つと、一階ですよ。何時頃ですか？」

「あれは、ちよつと教室に忘れたケータイのコンセント取りに行つた時だから……………4月の半ば位かな」

4月の半ばか。ということは、鈴女ちゃんがうちの部に入る前…

…。  
「それでな？ 彼女、どうやら三年の男子に追われていたみたいでな」  
「それって……？」  
「しつこく、追われていたな。まあ、今はもう続いてないとは思うがな……」

三年の先輩に追われていた？ ……でも、そんなことを言われても、僕が直接見たわけでもないし、それが、『彼女の僕に対する接し方に裏がある理由』に關係するのだろうか……？  
「それが、さっき言ったことと關係あるのかって思ってるだろ？ まあ、確かに關係あるかは……わからん。……それに。何があっても、お前は彼女と付き合っっていくんだろ？」

「いや、まだ、彼女のこと……好きだなんて、言っただけですよ」と、僕が言うと。

「ははっ」

と、遠藤さんは乾いた笑い方をした。

「……あっ」

「ん……？ どうした？ 清水？」

「いえ、コーヒー飲んだからちよっと、トイレに」

「そうか……あっ！ ……長くなるようなら言っておくけど、俺そろそろ帰るから」

「ああ、そうですね、わかりました。また、時間があるときでも顔を見せてくださいね？」

「おう。まっ、ひまになったらな」

そんな、やりとりをして僕はトイレに向かった。

女子トイレの手洗い場には丁度、個室から出てきた、鈴女の姿があった。

ふう。手を洗ってハンカチで手を拭く。鏡で髪型を直してじつと自分の顔を見た。

人は……それぞれ自分の顔っていうものにどう感じているのだろうか。今でこそ、自分の顔だなと、特に思うところもあんまりないけど、中学生位の時なんか、ちょっとたれ目な所とか、鼻が丸い所とか、嫌いだった。テレビに出ている女優さんとかみたく、高い鼻に憧れていたし、もっとすらっとした美人な女性になりたいと思っていた。

でも、他の女友達には可愛いとかってそれなりに言われもした。わたしはそんなことは小学生の時に言われた頃から子供の中の社交辞令みたいな物だと思っていた。

中学の卒業文集の時、良くある、なんでもランキングみたいなものでわたしが、『お人形みたいに可愛い女の子』というランキングで3位だったのを見て、男子からも少しはそういう風に思われているのかなあ、なんて凄く照れたりもした。

それまで、そんな子供っぽい自分の顔があんまり好きでは無かったのだけれどその出来事が一つのきっかけで、なんだかわたしは自分の顔が好きになった。

……別に、自分が凄く可愛いほうだ。なんて思っではない。ただ、自分の中で自分の顔に自身が持てた。そんな風に自分の顔に納得できたっていうか、自信が持てたんだ。

鏡を見て、自分の顔を見る度に、そのことを思い出す。それは鏡を見るという行為自体が、そのエピソードに直結しているからだ、と思った。

「……さて。そろそろ部室にもどろろかな」

もう、気分転換も良い頃合かな。うん。

「あつ……」

ていうか、考えてみると『女の子がトイレで長居』なんて、どう転んでも良く思われないうじゃない!!! うわわああ……やっちゃた

なあ……。なんて、思われてるんだろ……。うわあ……。……っていうか、女ってホント、めんどくさいな。うん。

開き直ったように、わたしは部室に戻るのだった。

戻るはずだった。

「やっと、あえたねえ……。鈴女ちゃん」

いやな人間に出会ってしまった。出会いたくなかった。『あいつ』に……。

なんでだろう？ 二階のトイレなのに。……なんで？ なんで、こんな所まで……。

本当に……。本当に……。キモい。キモいよ。ホントに……。

わたしは後ずさる。イヤだ。こいつにだけは、会いたくなかった……。見たくも無い。

「いやさあ、最近つたら、放課後どころか、昼休みにもいないんだもん。すぐに一年教室まで行って、会いに行ってるのにさあ……。……どこ行ってるのかあ……。……って、ほんと、わからなかったよあ？」

「……………」

わたしは声も出なかった。言うことも、特にない。足が言うことを利かない。すぐに逃げれば良いのに、すぐに走り出せば良いのに。なんでだろう。恐怖で震えてしまって……。危険な動物からは背を向けてはいけないみたいな教えに縛られてしまって……。

結局、後ずさりしか出来ない。イヤだ。コワイ。コイツは生理的にイヤなんだ。

「今日は、気まぐれで二階に行ってみるとね、ラッキーだね！？ いるんだもん！ 鈴女ちゃんが！ いや、ホントついてるよ！ 君に逢えたなんてー」

久々にわたしとあったからか、すぐに手を出そうとはしてこなかった。お願いだから……。このまま震えが止まるまで……。逃げ出せるようになるまで、手を出さないでええ！！

「どーしたの？ そんなに怯えたお顔しちゃって？ そんなに……

俺のことが嫌いなのか……？ ええ？ ……えええ！？」

カレは声を荒げる。ヤバい……怒ってる……もう限界だ……。

と、その時、ちょうど右側の男子トイレの出口から人が出た。あれは……あつ！ 清水先輩！ わたしは清水先輩がちょうどわたしの真っ直ぐ右に出たときに『バツ』つと、先輩の腕を掴む。

「先輩！ 訳は後で話すから！ わたしを引っ張って逃げて！ 早く……！」

わたしは必死で先輩に訴えた。思えば敬語とかも全く気に留めずに使っていなかった。

「だめだあ！ せつかく会えたんだ！ 行かせるかよお……！」

カレは、今にも殴りかかって来そう勢いでわたしたちに詰め寄ってくる。

「お前は……！」

と、一言、なにか察したような顔で清水先輩はそう言った後、何も言わずにわたしの手を引いて、走り出した。

「あつ……待て！ コノツ……！」

カレが怒りを露にしながら、追ってくるが、清水先輩は迷い無く、グングン遠くまでわたしを引っ張ると、カレとの距離はグングン縮まっていた。

力強く、わたしの手を握る清水先輩の腕はこの時はすごく、頼れる腕に見えて、わたしの胸がすごくきゅんとなった。



助けて！ せんばい！

少し、時間は遡り、こちらは清水君。

缶コーヒーを飲んだものだから尿意を催してしまった……。

と、僕は部室から一番近い、二階のトイレで用を足す。僕のナニからナニかが出る様子とかそんな具合を細かく描写してもどうかと思うのでそれは省く。すっきりした所で、手を洗い、出ようとする  
と何か男の声が聞こえる。

「ん…… あっちって、女子トイレ側じゃないか？」

女子トイレの前で男が喋ってるとか、余り良い状況じゃないと思うんだが……。

まあ、僕には関係ない。そう思い、僕は何事も無かったように部屋に戻るうとした。

帰り際、何気なく横目で彼らを見ると…… 鈴女ちゃんだった。と、知らない男。無駄に背が高くて、なんだが、嫌な雰囲気をもとっている男だった。

まあ、プライベートには立ち入るのはね。そう思い、僕はそそくさと立ち去るために横切ったその時、鈴女ちゃんが僕が横にいたと気付いたとほぼ同時に僕の腕を素早く掴んできた。普段、大人しいイメージと言うか完全に大人しいタイプの鈴女ちゃんがそんな機敏な行動を取ったということに、僕は驚いていた時。

「先輩！ 訳は後で話すから！ わたしを引っ張って逃げて！ 早く……！」

と、困惑の表情で僕を見ながら鈴女ちゃんが言った。僕はすぐに只ならぬ雰囲気察して、状況の把握を試みた。

「だめだあ！ せっかく会えたんだ！ 行かせるかよお……！」

と、男が叫びながら僕らに詰め寄ってきた。そこで僕がなにかに気付いた時みたいに頭の中で何か繋がった気がした。

「お前は……！」

と、思わず声が出てしまった。そうか、コイツは……さつき遠藤さんが言っていた、『鈴女ちゃんを着け回していた三年の男子』だろう、おそろく。そうと決まれば、おちおちしてられない！ さつさと逃げなきゃ……！」

僕は鈴女ちゃんの手をがっちり握り締め、全力で走って逃げた。手加減する余裕も無く、腕に跡とか付いて無いか……。なんて、心配したけど、それどころじゃないので勘弁して、ホント、いやホントゴメンナサイ。

ガチャン。と、体育用具室の扉の開く音が鳴る。ついでに鍵も閉める。

「とりあえず、ここで隠れてよう？ あいつもそのうち諦めるさ」

そう言って、僕は薄暗いその部屋を見渡す。

「せまい……ですね」

「うん……」

本来なら、もう少し広いだろう。しかし、この用具室はほとんど使われていないマットだの、跳び箱だの、パイロンっていうんだっけ？ そんなものばかり置いてあって実際には結構狭かった。

「うわ、この跳び箱って今は使っていないやつですよえ、なんで、まだ置いてるんだろ。このマットも明らかに昔のやつですよー」

鈴女ちゃんは初めて入った場所で、初めて貰ったおもちゃを見た子供のようにそう言う。マットなんかはほこりっぽい様に見えるのに、かまわず触ってみたりしている。

「そんな、めずらしいかい……？」

そういう、さめたことを言うのはダメなのかもしれないけど、僕は思ったことを言わずにいらなかった。

「えー？ 面白くないですか？ こういうの、あ、わたし、好きなんですよあー、なんかこういう、古いもの見るの。なんかわかりませんか？ この跳び箱の木の色の濃さとか、一とか二とか漢字の昭

和っばさですとか」

……そういうもののかなあ。僕はそんな彼女の感覚はさっぱり理解できなかった。『古い』というだけでこんなにも心躍らせて、テンションが上がる鈴女ちゃんが全く理解できないって言うのが、本音だ。

そうやって、僕らは暫く、そんな風に言い合っていたんだけど、そう言えば、今はあいつから逃げている途中だったと言うことに気付く。

「そっいや、あいつは？」

「あつ！ 忘れてましたね」

そう、鈴女ちゃんが言うのと、扉に耳を付ける僕の真似をして、同じく耳をつけて外の音を探る。

……外からは、音はしない。どうやら、この周辺で人は誰もいないようだ。あいつはなんとか、撒いたらしい。そう悟って、ふと、僕は集中していた感覚を耳から戻して前を見ると、目の前に鈴女ちゃんの顔があった。

「あつ……」

思わず、声が出てしまった。そりゃだって目の前に鈴女ちゃんの顔があるのだから。

えっ？ っていつかなに？ コノ状況？ 他人から見れば、まるで恋人同士が愛を囁き合っているかの、ポーズだ。だからといって僕はすぐにこの姿勢を変えると、変に意識していることがばれてしまう。今ここには僕と鈴女ちゃんしかいないのだ。

当の鈴女ちゃんも耳に意識を集中しているため、そういう気まずさはまだ感じてはいないようだ。ていうか、なんで鈴女ちゃんはこちら向いてるんだらう。……と、一瞬考えてみたが、たしかにあちらを向いた状態というのも可笑しい。

なにせ、同じ方向に二人で扉に耳を当ててるっていうのも、逆に

そのほうが恥ずかしい気もしないでもない。ああ、考えすぎだな。僕は。

そうやって、ボーッと考えていたもんだから、結局、鈴女ちゃんのほうを見たまんまで、硬直することになってしまっていた。そんな時、やっと、耳から神経を傾けるのを止めた鈴女ちゃんが、こちらを見る。

「あつ……………」

鈴女ちゃんが僕と同じことを言って、驚いた顔をした。

「……………」

「……………」

お互いに沈黙。なにを言えば良いのか。どうすれば良いのか、僕にはわからない。

「そ、そ、そう言えば、もう、声は聞こえないね！？ アイツはもうどっかいったんじゃないかな！？」

と、僕は沈黙に耐え切れなくなって言う。なにが『そう言えば』だ。今、それを確認するために、耳を当てていたんだろう？ なのにそう言えばって。明らかにおかしいことを言っている。

「そ、そうみたいですわねっ！？」

だが、鈴女ちゃんも鈴女ちゃんで、しどろもどろになりながらも、そう言う。

「……………」

咳払い…………でもないけど、それに近いような感じでその場を誤魔化して、鈴女ちゃんは下を向いた。

そうやって、照れて下を向く鈴女ちゃんが余りにも可愛くて。この薄暗くて、狭い空間で。跳び箱と、マットの。昭和のにおいのする、この独特な空間で。

…………僕は、なんだか、変な気持ちになっていた。普段、化学部室で鈴女ちゃんと話している時の雰囲気なんかじゃない。そこに大松先生もいて。今日なんかは、遠藤さんもいたりして…………あの空間。

……なんだろう。あそこは違う空間だ。まあ、そうか。ここは狭いし、暗いし。あと、さっきまで鈴女ちゃんの手を引いて走って逃げてきて……その時の高ぶりも残っていて。

そして、静か。静かだった。学校内とは思えない静けさ。ましてやこんな時間に。

「だれも……いないみたいですね……」

ふいに、鈴女ちゃんがそう言った。そうだ。なんで誰もいない？ 体育館には部活で人がいるはずなのに……。と、思ったけど考えてみれば、そうだ。今日からテスト一週間前なのだ。運動部の部活動は禁止されている。

「今日からテスト一週間前だから、運動部は休みだよ……」

と、僕が言うと。

「えっ？ うちの部は？ 休みじゃないんですか？」

「いや、そもそも、うちは部じゃないし……！」

そう、化学研究同好会だ。……本来は。それに運動部じゃない。なるほど……」

そんな鈴女ちゃんの頷き程度の言葉も静かなもんだから一字一句、反響する。それがなんだか恥ずかしい。まあ、恥ずかしがるのは僕じゃないんだけど……なんか雰囲気だね。

「……」  
「……」

それからも、顔をお互いに向け合った体勢で、じつとする。もう、外の音なんか、聞いてないのに耳を付けた体勢でいる。

意味も無くその体勢でいれば、相手にだって変に思われる。だって、なんでこんな近くで顔を見合っているんだ。普通はすぐに離れるはずだろう？ だけど、お互いそれをしない。それをしない理由……。それは？ 相手と同じ体勢で居たいから？ お互いの顔を見たいから？ お互いに離れたくないから？ もっと、近くに寄りた  
いから？

じゃあ、その……。触れたり……。したいと思っているのかな？  
彼女も僕も。

……僕は……。そうなのかな。でも、離れない。離れられない。この場所から。この空間から。心地いい。

……狭くて。暗くて。彼女と二人きりのこの空間。耳を澄ませば、彼女の息使いまで、聞こえている静けさ、距離。

「……も、もう、出ましようか？」

えっ？ ……でも、彼女は気まずくてか、そう言う。

……ここで。この空間で……。一緒にいたいと。そう、思ったのは。僕だけ……。か？

「そ、そうだね!？」

でも、僕はそう言う。そりゃあ、そうだ。ここでなんていう？

他に。君ともっとここに居たい。とでも言うのか？ たった今。彼女が同じ気持ちじゃないと知った瞬間に？ そんなの……。言えないだろ。

ガチャ。

彼女が、扉を開ける。もう、ここにいたってしようがない。あいつはもう、何処かに行っただろうし、ならば、さっさと今のうちに帰るに越したことは無い。

「……あれ？」

鈴女ちゃんがそう言い、不思議そうにしている。

予期せぬことが起こった。……開いてなかった。扉を開けたと、そう確信した。でも、開かなかった。なぜ？

「これ、かぎ壊れてるみたいだよ……？ 開かないもん」

そう、彼女が言うので、僕もためしに、開けようと試みる。

……が。

「開かない……」

開かなかった。本気で。内ロックを掛けたのは良いが、開けられなかった。どうやら完全に壊れているようだった。

「これ、完全に壊れているよ」

僕がそう言うよ。

「うわあああ……どうしましょう……ね。出れない……ですね」  
と、鈴女ちゃんが言った。その時の彼女は本気で困った風にも見  
せたけど、その後は、案外、嫌な顔せず、どうしようかという冷静  
な感じだった。

「しばらく、先輩と二人きりになりそうですね……」

そして、鈴女ちゃんは不意にポツリとそんなことを言う。暗くて  
狭い部屋の中僕の顔を見上げて。

そんなこと。言われたら……。もう、僕は……。僕は……。なんだ  
か、わからない。

僕と、同じ気持ちじゃないと思った！ さつき。だけど……。  
雰囲気で分かったことは、彼女も僕と一緒にここにいっても良いっ  
ていう……。ここにいたいっていう、僕と同じ気持ちのようだった。  
僕と同じ気持ち……。ほんとうに？

でも、僕は……。気持ちが止まらない。

さつき、遠藤さんにあんなことを言われたからだろうか？

それも一理ある。

いつも、一人で部屋にいた僕に昼も放課後もいつも一緒にいてく  
れたからだろうか？

それも一理ある。

今さつき、あの、3年の男に怯える鈴女ちゃんを見て、本気で守  
りたいと、この子を守りたいと、そう思ったからだろうか？

それも……。一理ある。

……。だから、僕は。

「鈴女ちゃん！」

「はいっ！……あっ！……えっ？」

戸惑う、彼女を余所に……。抱きしめて、キスをした。

## 擦れ違い

唇を触れ合わせただけの、慣れないキスを終え、僕は顔を離す。

……鈴女ちゃんの方に目をやると彼女は酷く困惑した表情だった。

「……………」

言葉にならない声を出して、鈴女ちゃんは体育用具室の奥に向かった。その目には……涙……？

「貝原……さん？」

僕は焦った。なんて勝手なことしてしまったのだろーと思っ

「すいません……わたし……」

「いや……だった？」

すぐさま、そう言い返す。

「……わかりません、えつと……」

鈴女ちゃんはなにが言いたげだったけどそのまま言葉を終える。

「あの……清水先輩は……わたしのこと、好きなんですか？」

「えっ……？」

直接本人に聞かれるとは思っていなかった。鈴女ちゃんのことか

……………。僕は……。

「好きだよ……」

と、僕は言った。

「……………ん」

薄暗い中ではつきりは見えなかったが、鈴女ちゃんはちょっと困ったような顔をして俯いた。そうして、少し考え事でもしていたのが暫くしてこちらを見た。

「あの……。清水先輩。ちょっと……ひどいこと言っ

「え……？」

そう、思わず口に出た。ひどいこと？ な……なんだ？



「な……なに？」

緊張して声が響かなかった。

「あ……あの。わ、わたし……わたし、先輩を……騙してしました」

そう言われて僕は、なにを言われたのか理解できなかった。

「だ、騙していた……？ どういうことかな？」

「あの……実は、わたし、さっき三年生の男の方に追われていましたよね？ あの人に普段から校内で近寄られるんです」

「それは、遠藤さんに聞いてるよ、それがどうかしたの？」

「はい……それで、わたし、あの人に付けまわさるのが嫌だったんです。わたし、この学校には隣町から通っているので友達はいないって言うのは前に話しましたよね。だから、余計にクラスでも浮いていて……それで、三年の人から近寄られてるなんて言われた日には、余計にクラスで目立つちゃうだろうから、嫌だったんですよ」

「うん……」

「あの人は、最初は放課後だけだったんですけど、わたしが逃げると、放課後はおろか、昼休みにまでわたしのクラスにまで来るようになりました。このままだと学年で噂になるのは時間の問題だと思っただけです。だから……」

「……だから？」

「どこか……放課後に姿を隠せるようなところ無いかって、そう思っただけ、あの日、化学部室に入ったんです……」

あの日……。最初に鈴女ちゃんが来た日か。

「それで部室に入って、ここなら放課後、姿を晦ますのに丁度良いかなって」

「……そっか、だからあの日、部室の中を見渡していたのか、それにすぐにうちの部に入ることを決めた。あれはさっさと放課後に隠れるところを確保するためかい？」

「……はい」

「そっか……」

可笑しいと思ったんだ。ロクに勧誘もしてなかったのにうちの部なんか人が来たこと。それに昼休みも放課後も毎日のように、すぐに部室に来ていた。まるで休み時間は全部部室にいなきゃなんないみたいだ。

「でも……でも、それで？ なにを騙していたんだい？」

それだけだったら、彼女の勝手なうちの部に入った理由に過ぎない。まあ、部に興味ないのに部に入るといふのもちよっと問題といえれば問題だけだ。

「……わたし。だれか、男の人と仲良くしておけば、あの先輩が諦めると思ったんです」

「……………」

それはどういう？

「えっと、つまりですね。清水先輩と仲良くしておけば、相手が勝手に勘違いして、あるいは先輩が助けてくれると思って……………」

「そういう打算があつて、僕を利用したってこと？」

「……はい。すいません」

鈴女ちゃんはバツの悪そうな顔をして、そのままへたり込んだ。

「そっか。じゃあ、貝原さんは僕のことどうとも思っていないってこと？ ……いや、はつきり聞こう。僕のこと好きじゃないってこと？」

僕がそう聞くと。

「……………わかりません」

鈴女ちゃんはそう答えた後。

「先輩のことは……………嫌いじゃないです。でも……………今まで先輩に寄り付いていたのは、そういう打算があつて……………わたしの本心からの行動じゃ……………ありませんでした」

と続けた。

「それは……………いつまでそうだったの？」

「……………さつき、清水先輩がわたしにキスした直前まで……………」

……そうだったのか。

「じゃあ、今は？」

「今は……その、き、キスされてから、わからなくなっちゃって。わたし、初めてで……それで、びっくりしたのと同時に、わたしとんでもないことしちゃってるなって……」

僕にキスされたことがきっかけで、自分の本心ではない行動が、演技が崩れてしまったってことか。

「あの……だから、今、先輩がわたしに向けた思いも……作り物の感情なんですよ」

そう言われて、僕はショックだった。せつかく彼女のことを好きになったのに、勇気を振り絞って、アプローチしたのに……。全て彼女の計算通りだったって言うのか……。今ここで、鈴女ちゃんに付きまとっていた男から助けたのだって、彼女の、計算通りだっていうのか。

「クソツツ！ なんなんだよ！ この気持ちは！！ なんだったんだよ！ 僕のこの気持ちは、嘘の演技で作られた感情だったって言うのかよ……それで、利用されて、良いように、使われて……。君は……君は最低だな……僕を何だと思ってるんだ？ 馬鹿にしているのか？」

僕は声を荒げて、彼女に怒鳴った。彼女にはとんだ恥をかかされた。なんだよ、告白までさせられて、本当はそう仕向けられていたなんて……人を何だと思ってるんだ。この子は。

「……すいませ……ん」

「誤って、済む問題かよ！？ 君は僕の気持ちをもてあそんだんだぞ？ 君の嘘の気持ちに惑わされて、僕に告白までさせて！ とんだ生き恥さらさせてくれたな！」

「すいませ……ん 誤って済む問題じゃないと思いますけど……」

「……本当だよ。僕は真剣だったんだ。僕の気持ちを踏みにじった君の罪は重いよ……」

「あの……わたし、どんなことでもしますから、許してください……」

彼女は泣いていた。僕の怒気に当てられてか、怯えきっていた。こうやって、彼女に当たってもしょうがないのかもしれない。だけど、僕はとても冷静になんて要られなかった。

「なんでもするって言ったよね？」

「えっ？ ……あ、でも！ 変なことは……やめてください、すいませんけど……」

変なことって。僕がエツチな要求でもすると思っっているのだろうか？ 僕はそんなクズ人間じゃない。なんて、僕だけが思っっているも他人にはわからないことだ。まあ、それはいい。そういうことなんて今まで生きていて腐るほどあったことだ。

「僕がさつき、したこと、言った事……全部忘れてくれ」

これで……無かったことになる。

「……えっ？ わ、わかりました」

彼女はそう答えた。それから、暫くして部屋にあったドライバーで、なんとか鍵をこじ開けて、僕らはそれから一度も目も合わさずにお互いに帰路に着いたのだった。

翌日。前日に彼女と気不味くなったからと言って、僕が化学部室にいないのも可笑しい。変だ。大体、昨日の一件は彼女に完全に非があるのだ。僕はなにも悪くはない。ただ……とんだ恥をかかされただけだ。だから、こうしていつも通り化学室でなんとなくいても、彼女に対する嫌がらせなんかじゃない。決して。

そんな風に自分に言い訳しながら僕はいつもの通り、なんとなく化学の勉強に勤しむ。誰かさんがもう、来る頃かな、なんて思いながら時計を何度も見る。結局、僕は誰かを待っているのだろうか？ 誰かを……。そうやって思いつめていた時、ガチャッと、化学部室の扉が開く音がして、僕はビクッってなりながら、扉のほうを見

た。

「あ……こんにちわっ」

初めて、ここに入ってきた時の様な、おどおどしさで鈴女ちゃんが入ってくる。

「い、いらっしやい」

軽くそっけなくも僕がそう言つと

「あっ……はい！」

鈴女ちゃんは少し、パツと曇らせていた表情を明るくして、答えた。昨日が昨日だから、僕の反応がどうなのか、不安だったのだろう。この様子だと僕に無視されるかもしれないとでも、思っていたのかもしれない。けど、そこまで思っていないながらもここに来るなんて、本当に彼女はここに来るといふ選択肢しか無いのかななんて、少し同情した。

僕はあくまでも昨日のことを無かったことにしてほしただけであつて、これからの関係を無かったことにしたかつたわけじゃなかった。彼女が交流を求めるなら僕も相応の交流を求めるだけだ。それ以上何も無い。

「そつだ、貝原さん。今日は簡単に作れて、実用性もあるものを作ろつ」

「えっ？ なんですか？」

「携帯カイロだよ、実はあれ、簡単に作ることが出来るんだ。まだ、たまに肌寒いし、実用的でしょ？」

「えええ〜。まだ、夏ですよ！？ この季節にカイロですか？？」

「い、いや、アレだよ、ほら、まだたまに寒い日とかあるじゃない？ あと、そだ。雨とか、大雨とか降つた時なんて、寒いしょ？」

そんなときとかさあ」

うわあ、我ながら苦しい。ケド、携帯カイロは本当に便利なんだよなあ。夏には必要ないけど。

「ふふふっ……まあ、いいんじゃないですか？ ケータイカイロ、

もってて便利そうですね、たしかにまだたまに寒い日もあります  
しね！」

苦し紛れに言い訳した僕がそんなにも可笑しかったのか、鈴女  
ちゃんは、笑いながらそう言ってくれたのだった。

## 暖かい実験と冷めた心

部室のテーブルに並べたのは、カイロを作る実験道具。鉄粉、塩、水、謎の粉、プラスチック製の袋をいくつか、用意した。

「さて、と。じゃあ、作るうか、カイロ」

「先輩！ 今回の実験は、具体的にはどんな実験なんですか？」

と、笑顔で発言する鈴女ちゃん。

「おつ、いい質問だよ、貝原助手。今回の実験はだね……」

「あつ……手短にお願いますね……！？」

気付いたように釘を刺された。前の一件には相当答えたらしい。

まあ、僕が悪いんだけど。

「ああ、わかつたよ。今回の実験は、使い捨てカイロの製作です。

鉄が酸素と化合する、つまり酸化した時に発生する熱を利用したもので、鉄粉に食塩水を混ぜ合わせるって言うのが、基本だよ」

「この粉はなんですかあ？」

と、白茶っぽい色の粉を指差して鈴女ちゃんと言う。

「それはね、バーミキュライトという土で、ガーデニングなんかに使われる物なんだ」

「えと……ああ、あの、黒いゴムみたいな鉢に入ってる土ですか？」

なんか粒が大きい」

「そうそう、よく出店とかで売られてるようなやつね。この土には穴が程よく開いていて鉄粉に混ぜることで空気を持続的に供給できるんだ。それで反応が持続する」

と言って鈴女ちゃんを見る。鈴女ちゃんはこちらを向いていてなんとか話を理解しているようだった。……まだ、なんとか付いてこれているみたいだ。

……。

僕の用意した実験道具を鈴女ちゃんはわいわいと手に取って見回

している。

別にそんなに面白いものは用意していないのだけれど。と、僕は思ったが口には出さないでおいた。それほど実験の経験の無い鈴女ちゃんにとってはこんな簡単な実験でも全てがものめずらしいのだろう。まあ、実験は初めてではないけど最初の実験はほとんど僕が用意していたものを見せたただけだったし、実験と言うよりホットケーキ食うのが主だったからなあ……。そんなことを思いながらぼやっと彼女を見ながら僕は考え事をしていた。

……鈴女ちゃん。彼女を好きになったのはいつからだっただろうか。人間って不思議なもので、人を好きになるっていう感情はどうしても曖昧なこと、完全な答えは出ない。

よく、小説や漫画なんかでは登場人物が恋をしていたりするとそれは簡単に気付くことが出来る。けど不思議なことにはいざ、自分になってみると簡単にはわからない。自分自身の感情と、それに関係する“恋”には人は鈍感になってしまうのだ。その理由も考えたことはある。それは例えば他人の恋路と違い、自分のそれはそんな簡単に結論を出せないからというのが一つ。それに、客観的に見て明らかであっても、いや、明らかであれば尚のこと慎重になる。そういうことなのではないだろうか。

例えば、90%の確率で100万円当たるくじがあったとする。但しはずれると1000万円払わなければならない。そのくじを引けるチャンスは一度きり。そしてそのチャンスが僕に回ってきたとする。おそらく多くの人は引いたほうがいいと思う。なぜなら90%というのはかなり高確率であるし、くじそのものは悪い条件ではない。10%の負けは1000万で90%の勝ちが100万なのだから。

だけど、仮に負けた場合損するのは事実だ。もし、本当にこんなチャンスが回ってきたとしたら決断の日の前日の夜なんて1000



万円負けた場合のことばかり考えるのではないだろうか。……そう、この話で言いたいのは『人間、他人事だから簡単に決断できる』ってことだ。いざ、自分のこととなると途端に冷静な決断ができなくなってしまう。

……いや、それが正しいのかもしれない。人間は。

なぜなら、客観的には常に強気でいられる冷静な考え方が出来ながら、自分に対してはそんなに強気な判断は出来ない。だからこそ人間というのは常に安定していられる。ギャンプルを避けていけるのだろう。

「先輩！ これ、混ぜ合わせるんですよね？ やってみても良いですか？」

「……………うん」

なにか言われたような気がしたけど僕は余り聞いていなかった。

……しかし、恋とは不思議なものだ。言葉では『好き』か『好きではない』の差があるものの、実際にはそんなにいきなり気持ちが大きく変わるわけではない。いつのまにか好きになっていて、そして好きかどうかは自分ではよく分かりえない。僕は鈴女ちゃんのことが好きだけでも、実は何がどう好きなのかとか、どれくらい好きなのか、あるいは世間一般では好きではないのかもしれない。だけど、たしかなことは『彼女という時間は嫌いじゃない』ってことだった。

そんな、考えに呆けてぼーっとしていたものだったから、僕は彼女の行動をよく見ていなかった。見れば、彼女はもう、鉄粉ハイミキユライトと白い粉を袋の中で混ぜていた。

……って、やばい。直に混ぜると反応しすぎて厚くなりすぎて危険なんだ。だからティッシュで包んでから袋の中で混ぜて振るんだけど直に入れちゃったよ！！

「鈴女ちゃん！ やばいつて！ 直に混ぜると反応しすぎて……………」

僕が、そう注意をしたときには少し遅かった。彼女は『えっ？』なんて言いながら、シヤカシヤカ袋を振っていた。

「あ、あつう……！」

そして次の瞬間、鈴女ちゃんはそう言って袋から手を離れた。

「だ、だいじょうぶ!?」

慌てて僕は鈴女ちゃんに駆け寄った。彼女の手をそっと掴み直に袋を触れた右手を見る。彼女とは自然と密着する形になってしまっているけどこれは不可抗力だ。

「せ、せんぱい。だいじょうぶですよ……ちょっとびっくりしただけです」

「ダメだつて！ こういうのは重度じゃなくても放置するよりすぐに処置したほうがいいの、大げさに見えるかもしれないけど、すぐ処置したほうが直りも早いんだからするに越した事は無いよ」

そう言つて、僕は鈴女ちゃんの手を取つて流しに連れて行く、蛇口から水を出し患部に当てる。背丈の都合で鈴女ちゃんに覆いかぶさる様な状態になる。

「……つと。どの辺が痛む？」

「え？ いや、あの……」

鈴女ちゃんはしどろもどろになっている。そんな場合じゃないのに。しょうがないから僕は彼女の右手を見る。見ると小指、薬指、中指、の三本の先端が少し赤くなっていた。

そこを重点的に流水に付ける。

「ごめんね、僕がちやんと見ていれば良かったんだけど……」

「えっ？ そんな、わたしが勝手にやっちゃったからですよ……清水先輩は悪くありません！」

「……そっか。ありがと」

なんだか、親に叱られているように強く、そう言つてくれた。

その後も後ろから抱いている様な形で彼女の手を冷やす。僕はその密着感には気にしないようにしながら彼女の手を冷やすことに集中した。

「あの……もう、痛みも無くなって来ましたし、自分で……」

……その、鈴女ちゃんの言葉を僕は黙殺した。離れたくなかった。だって、凄く良い匂いがするのだから。

僕が何も言わずに鈴女ちゃんの手を冷やすのに集中している振りをしていると彼女はそのままされるがままになった。

そのまま、何分かして。

「もう、いいかなっ」

さすがにいつまでも彼女の腕を支えているのも不自然だと僕は蛇口を閉めた。鈴女ちゃんはこちらを向くと、照れたような表情を浮かべながら『ありがとうございます……』と、尻つぼみ気味に言いながらそそくさと部屋を出たのだった。彼女がいなくなっただけでそこには言い知れぬ空虚感が残ったが、彼女の香りはそこにかすかに残ったままだった。

ときどきした。恥ずかしくなって逃げ出してしまった。顔はまだ少し火照っていた。なんでだろう？　なぜだろう？　清水先輩の顔を正面から見れなかった。意識しすぎていた。なんでだろう？　負い目があるから？　そうなのかな……。それだけなのかな……。勝手に実験を台無しにしてしまった恥ずかしさと一生懸命にわたしの手当てをしてくれる清水先輩にパニックっていた。

わたしは……。ひどい女だ。清水先輩のことを利用しておきながら利用しておきながら　こんなにも……。先輩のことが……。

湧き上がる邪な思いを振り切りながら、わたしはトイレに向かっていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3476ba/>

---

こいの化学反応

2012年1月9日00時50分発行